





見学旅行

薬師寺の説教に感動

支えてくれた家族へ感謝

2年生は10月26～30日までの4泊5日で京都、奈良、大阪、東京へ見学旅行に行った。1日目は新千歳空港から羽田空港を経由し、伊丹空港へ。バスで大阪の難波へ移動し自主研修。2日目は薬師寺で坊さんの説教を聞き、東大寺、奈良公園、清水寺を巡った。3日目は京都、大阪の関西周辺の自主研修。4日目は新幹線で東京へ向かい、東京ディズニーシーへ。5日目は自主研修で東京周辺を回った。

野内海成君(建2)は関西の自主研修で大阪の道頓堀やアメリカ村に行った。東京で

は秋葉原でリサイクル店やホビーショップを回った。「一番心に残っているのは薬師寺だ。坊さんの説教が面白く、声の響きも心地良かった。あとでインスタグラムを見たら、寺の日常がたくさん投稿されていて驚い



国宝の薬師寺東塔を見学する電気科2年生

た」と話す。大阪の道頓堀は「関西に憧



坊さんの説教に聞き入る2年生

れがあったが、実際に大阪に行くと見ると想像以上に活気にあふれていて、さらに興味が湧いた」と振り返る。

また、自主研修のときの昼食にもんじゃ焼きを食べに行ったら、班員が上手に焼いてくれてとてもおいしかったことも良い思い出という。普段は人をまとめる機会が少ない中で班長を務め、多くの指摘を受けながらも「貴重な経験ができた」と話した。

山口裕斗君(電2)は、自主研修で大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンと道頓堀、そして東京の渋谷と普段なかなか訪れることができない場所を巡った。

ユニバーサル・スタジオ・ジャパンではちょうどハロウィンシーズンと重なり、入場した瞬間から色鮮やかな飾りやミニオンたちが迎えてくれたという。被り物をつけて園内を歩き回り、店で買い物をするスタンプから「いってらっしゃい」と声をかけられたこ



ベンチを渡す建築科(右)

建築3年木工班が製作  
幼稚園にベンチ贈る

建築科3年の実習木工班の7人は園児用のベンチを製作し、11月4日に4台を大谷さくら幼稚園に寄贈した。これは幼稚園の先生が工高祭に来校して、科展示のベンチを見て建築科に依頼したもの。チームリーダーの赤間梨緒羽さんは「ベンチを作るときには園児がけがをしないように、角に丸みをつけたり、節のところに引っかかりがないように面にやすりをかけた

とが特に印象に残っている。「買い物をしなくても、歩いているだけで迫力があって、ただその場にいる時間が本当に幸せだった」と語る。

続いて訪れた道頓堀では、観光地らしく外国人観光客が多く、日本人を探すのが大変だったという。しかし街並みはしっかり大阪らしさがあふれており、有名なグリコの看板や本場のたこ焼きを楽しみ、

良い思い出になった。東京の渋谷では滞在時間こそ短かったものの、スクランブル交差点の活気ある風景を体感し「ほんの少しの時間でも、渋谷の雰囲気味わえて楽しかった」と振り返る。一方で、忠犬ハチ公像はハロウィン対策の封鎖で見られなかったことが心残りだった。

今回の見学旅行で最も学んだことは「事前の計画の大切さ」だという。「一か所にJRや私鉄、地下鉄の駅が集まっている、さらに電車の本数が多くて迷ってしまい、時間やお金を無駄にしまった場面もあったが、それも含めて良い経験になった。この旅行は高校生活の中でも特に思い出深い」と話し、支えてくれた先生方や家族への感謝を胸に今後の学校生活にいつそう励む決意を語った。

特集  
戦後80年⑥

悲惨さ残酷さを理解  
戦争は二度と起きてはいけない

特集「戦後80年」で第2次世界大戦を兵士として戦い、その後、シベリアに抑留された方の手記を読んだ感想を1年生に聞いた。

シベリアは生き地獄

電気機械科1年 木元丈翔

戦争の苦しみは、前線で戦う兵士や民間人への無差別攻撃にフォーカスしたものが多く、今回の特集「戦後80年」の兵士の手記は前

線を生きて抜いて捕虜になったという、戦後まもなくの苦しみを書かれたものだった。人間の最大の恐怖は死だと認識する人が多いためか、前線の兵士や民間人の「死」を描くことで戦争の悲惨さを伝えるものが多い。しかし、この話はシベリア抑留という生き地獄を書くことで戦争の悲惨さを伝える、他にはない新しいものであったと私は思った。

戦争に休息はない

情報技術科1年 畠山謙梧

私は特集「戦後80年」を読んで、戦争の悲惨さや残酷さを理解することができた。特に、シベリアは

私は兵士の手記を読んで、戦争は国家同士が互いに優劣を付けるものでしかないように感じた。結局、ソ連が日本に勝ったからシベリア抑留のようなことが起こったが、もし勝敗が逆であれば日本がロシア人を劣悪な環境下で労働をさせていただろうと思う。だから、戦争をせずに国家同士の優劣を付けずに対等だと思えることで、このような悲劇を回避できるのではないかと思った。

酷いありさまであることが容易に想像できた。「戦争に休息はなく、三度の飯もままならない中で行軍が昼夜なしに続いた。先頭の連隊は退路を遮断したソ連の戦車隊と交戦して

いるとのことであった。夜になると敵の照明弾が上がった。花火のようだ。伏せる。前の兵士の帯剣につかまり、その間目をつむる。とにかく眠い。前の方から順に起きる。また伏せる。戦場から離れるまでは眠ることはできなかった。重傷者の担架からまれる断末魔のうめき。後ろから銃でたたかれた。ハッと眼が覚めると隊列を離れかかっていた」とある。非常に悲しいし、二度と繰り返してはいけな

命の重さを感じた

電気科1年 竹村宗将

私は特集「戦後80年」を読んで、兵士の手記に、満州での戦いで関東軍の「兵士たちは休憩も三度の飯もままならないまま戦争を行っており、ソ連との銃撃戦では兵士全員が無我夢中で日本のために銃を構え、生も死もなかった」と書いてあり、戦争のつらさ、命の重さを感じさせられた。

しかし「戦闘が止んだとしても戦争はまだ続いていて、夜になると敵の照明弾が上がって、戦場から離れるまでは寝ることができない状態、行軍の落後は死を意味す

るほどだった。昭和20年8月29日、北満のイントルで停戦となったが、兵士たちはシベリアへ移送されることになった。防寒外とうをソ連軍からもらったが、シベリアで役に立ちそうもない者はソ連側でハネられ、仲間の7、8人がソ連軍に連れられていった」と書かれているのを読んで、戦争が終わった後も、母国に帰るまでは命の保証はないのだと感じた。

ソ連軍に連れられた人たちはシベリアで抑留生活となり、食事をピンハネされたり、弱兵は座して死を待つという残酷な目にあったりした。戦争は二度と起きてはいけないと感じた。

(次号へ続く)